

# 口承文藝における歌謡と説話

白田 甚五郎

一

昭和二十八年に、私は國學院大學の助教になりました。二十八年は大變に思ひ出深いものがあります。この年の九月三日に折口信夫先生がお亡くなりになりました。それから一月経つた頃、本来なら、折口先生に御指導を仰ぎたかつたといふ學生が私のもとへ参りました。説話研究會を學内で作りたいのだが、折口先生にお願ひができませんので、私に研究會の面倒をみてくれといふことでした。先生に御縁のあるものなら、不肖の身だが、引受けませうといふことになりました。それから國學院大學説話研究會の學生諸君と共に、説話の勉強をすることになった次第です。

それまでの歌謡・民謡の研究に加へて、私が説話の研究をするようになったのは、まさに昭和二十八年の秋のことでした。それからあと、私の學問は學生に引つ張られて來たやうなものでございます。學生と共に歩んで學問をするといふ道筋を通りまして、今日へと進んで参りました。今では、説話研究會や歌謡研究會で學んだOB諸君が、私に代つて研究會を指導してくれるまでになりました。私はもつぱら、大學院の少數の院生諸君と共に學ぶというやうなつもりで勉強をしてゐるわけでありませぬ。最近、日本の文部

省の招きでイタリーのベネチア大學出身のキャラさんが留學生として來て、大學院で聴講してをります。キャラさんは昔話の研究をしたいといふので、身近で國際交流をするつもりで、特別の時間を設けて、一緒に勉強をしてをります。そのキャラさんを含め院生四人と輪讀してをるのが、イギリスのクラッペの書いた『ザ・サイエンス・オブ・フォークロア』です。

二

柳田先生がこの本を民謡に關する御論文の中で紹介してをられました。フォークロアの學問をサイエンスと呼んだのは、一九三〇年（昭和五年）に出たこの本が初めてのやうです。昭和七年に國學院大學の豫科に入りましたときに、日本橋の丸善に行き、ふと目にした『ザ・サイエンス・オブ・フォークロア』を買つてきて、辭書と首つ引きで讀みました。目次を見ると今更ながら感じるころがあります。それをここへ持ち出したのは、前から説話と歌謡その他のジャンルというものがどのやうに組織だてられ體系づけられるのかといふことを考へてゐたからでございます。

サイエンス・オブ・フォークロアといふのは、口承文藝學といふのではございませぬが、イギリスのフォークロアといふのはな

るほどその名の通りかちいふ文藝的なものが主流となつてゐるの  
かが分るやうなものであります。參考までに紹介いたします  
へ、第一章 The Fairy Tale 第二章 The Merry Tale 第三  
章 The Animal Tale 第四章 The Local Legend 第五章  
The Migratory Legend 第六章 The Prose Saga 第七章 The  
Proverb 第八章 The Folk-song ところからは民謡關係に入るの  
であります。この『ザ・サイエンス・オブ・フォークローア』の中に  
歌謡が入つてゐるところは點で柳田先生が注目されたわけです。第九  
章 The Popular Ballad 第十章 Charms, Rhymes, Riddles  
第十一章 Superstition 第十二章 Plant Lore 第十三章 Ani-  
mal Lore 第十四章 Mineral Lore, Star Lore, Cosmogenic  
Legends 第十五章 Custom and Ritual 第十六章 Magic 第  
十七章 Folk-dance and Folk-drama 第十八章 Folk-lore,  
Myth, and Religion といふことです。

以上の十八章からなつてをりますので、今日の非常に社會學的な  
色彩の濃い、あるいは社會學的に傾斜してゐるとも言へる今日の民  
俗學とは大分異つてゐると思ふのであります。勿論、これをもつて  
フォークローアすべてを蔽ふものではございませんが、このやうな  
ジャンルだけで『ザ・サイエンス・オブ・フォークローア』を名乗  
るといふ研究體質がイギリスにあるといふことを思ひ知らされまし  
た。

また、我々口承文藝の學問の本山のやうに考へてゐるフィンラン  
ドのフィンランド文學協會のことにあります。ここは國家直屬機關  
ではございませんが、文部省が随分お金を出して組織されてゐるの  
です。私は二度フィンランド文學協會へ行きましたが、最初に行つ  
た昭和四十年で言ひますと、文部省から二億八仟萬圓の補助が出て

ゐるといふことでございます。同時に、フィンランドのさういふ研  
究機關といふものは、文部省補助に見合ふくらゐ民間から寄附金が  
集つてゐるのです。今日の金額に換算すると五億六仟萬、それほど  
でもないかもしれませんが、しかし、日本の國文學研究資料館の年  
間豫算と考へ合はせると、昭和四十年の五億六仟萬といふのはや  
り國立國文學研究資料館などより實質的な額は上になるのでせう。  
とにかくこのやうに國を擧げてフィンランドでは口承文藝の調査  
と研究にお金を出してをります。それがごく少ない人口の國、當時  
でいへば四百五十萬人といつてをるのですから、それだけの仕事を  
してゐるといふことは大變なことだと思ひます。しかも、一世紀半  
にわたつて色々な方面の研究が行なはれてをり、昔話・民謡・諺・  
呪ひ等にわたつて調査と研究が進められて、新しい種類のものが出  
るとすぐ分類されて位置づけられるといふ組織と機構が出来上つて  
をります。勿論、フィンランドはさうした研究が進むについては素  
地がありました。

十九世紀の初めにリョーンロットといふ言語學者がしました。方  
言の調査で村々を歩いてゐる間に、カレワラといふ優れた敘事詩が  
民間で傳へられてゐることに気がつき、その採集に奔走して、十年  
以上かかつてまとめあげました。そのカレワラが、今や、世界の文  
學財産となつてゐるわけであります。かうして約二萬二千行くらゐ  
の長編敘事詩が民間から發掘されてをるわけです。その調査・研究  
が今だに續いてをります。

しかも、フィンランドはロシアに大事な傳承地帯であるカレリア  
地方を大分とられてをります。カレワラの傳承にとつては非常に重  
要なものですから、今でも調査團を送つたりしてゐるといふ状況で  
ございます。とにかく、口承文藝の位置が非常に高いのでございま

す。學士院にも、文學と呼んでゐるやうな小説・詩等の學士院會員一人に對しまして、口承文藝の研究家も一人、會員になつてゐることからもそれは分ると思ひます。

そのフィンランドにおける調査項目を見てみると、私が見たときには十九項目ございまして、『日本民俗學』の昭和四十九年十月號に「口承文藝研究の向ふべき道」と題して紹介しておきました。その後、二十四項目になつたさうです。その項目は、Fairy Tale, Saint's Legend, Mythical or Local Legend, Historical or Local Legend, Etiological Tale 等、説話や、あるひは民語等にわたります。プロバル・リイトルミュージックといふやうな場合でもかなり範圍が廣いのです。やはり文學協會の名で行なはれてゐるのでかういふことになるのでせうが、考へてみると先程のクラッペの『ザ・サイエンス・オブ・フォークロア』とかなり重なり合ふものでして、このやうな素地がヨーロッパの説話や歌謡の研究にはあるのでございませう。

我が國では口承文藝の研究は柳田先生が大きな指導者だつたわけだして、先生の指導をふり返つてみると、昔話や傳説につひてはそれぞれその分類が一冊の本になつて著はされてをりますし、民謡につひても分類案が示されたりしてをります。が、どうもまだ、一つにまとめられてゐないやうに思はれます。したがつて、我々が口承文藝を一つの科學として、總合の統一體として樹立すべきであるし、したいと思ひますが、なかなか出来ないでゐるのが今の状態であります。しかしながら、この日本口承文藝學會が出来たといふのもある意味では口承文藝の研究を一つのサイエンスとして口承文藝學として自立するやうなことを願つてでせうし、本學會が一つの道標になるであらうと考へてをる次第であります。

### 三

このやうな思ひを持ちながら「口承文藝における歌謡と説話」といふ題を私はここに掲げました。かういふ問題を見通して行くのは、過去に遡つて歌謡や説話の發生を考へ、展開して行く姿を現在に至るまで眺めやり、さらには未來にわたつて展望するといふ精神と態度が欲しいのであります。歌謡と言ひ説話と言ひ分類といふものばかりを考へて行くと、段々細かい方へ落ち込んで、戸惑いどころか錯亂を起こしてしまひます。それ故、逆に高い處に登つて見下す必要があります。そのやうにして「歌謡」と「説話」を總合出来る點はないだらうか、それを「ウタフ」と「カタル」といふ大和言葉から考へてみたいと思ひます。

本質を考へるのに一つの方法は、語源を考へることでもあります。言葉といふのは時間的にも空間的にも變化いたします。例へば、*「よばふ」*は名詞化すれば*「よばひ」*ですけれども、今日*「よばひ」*といふ時には*「夜這ひ」*と書きます。すでに「源氏物語」のころから、夜這ふといふ意味に解して笑つてをります。解してと申しますのは、古態は求愛するとか求婚するとかいふ意味だからです。更に遡ると、求愛する爲のうたを歌ひ續けるといふことございませう。出雲の八千矛神が越後の糸魚川まで沼河比賣を訪ねて行つた時にも、自分で*「さ嬉ひ」*に行つたと堂々と歌つてをられます。その場合は決して*「夜這ふ」*といふ意味ではありません。求愛しに行つたわけで、必ず歌を伴つてをり、これは*「よぶ」*といふ言葉の再活用から來てゐます。このやうに言葉といふものは變化して行きますけれど、それでもどこかに元のものを残してをります。つまり、

「夜這ふ」といふことにしましても、愛に關する行動なのであります。時代が變つても、見通して行けば本質をつかめるといふことになると思ひます。言葉を單なる符號と考へるのではなく、言葉の持つ意味といふものの根つこをば探し求めるのも一つの行き方だと思ひます。

語源を見るときには『岩波古語辭典』は語源を多くのせてゐますが、「カタル」といふことについても詳しく書いてをります。岩波の辭典は連用形で出ていますので、「カタリ」の項目を見ますと、カタは「カタドリ(象)のカタ、型のカタと同根」とあります。出來事を模して相手に一部始終を聞かせるのが原義、類義語のツゲは知らせる意、ノリは神聖なこととして口にする、ハナシはおしやべりすることで室町時代以後使はれるやうになつた、と解説してをります。日本人の言語表現活動のいくつかを、多少づつ意味の違ひを區別して記してをります。

他の辭典でも同じやうであつて、「カタリ」については型といふもので説明してをります。早く『大言海』が形として表はすことがカタルだと言つてゐたやうな氣がします。以前は私自身の考へがなくて、さういふ説に従つてをりましたが、どうも納得が出來ませんでした。私は「ウタフ」と「カタル」について、これだけ古くからある言葉であり、そしてまた、日本人の言語表現活動として獨得な意味合ひをもつて同次元の言葉として使はれてゐるのは、何か同次元で解釋出來ないだらうかと考へてをつたわけです。岩波の古語辭典では「ウタフ」はどうかといふと、これはウタ(歌)アヒ(合)の略で唱和するといふのです。このやうに『岩波古語辭典』では「カタリ」の方では問題を感じていろいろな類義語を並べて區別しようとして試みてをるのですが、「ウタヒ」の方はわかりきつたやうに、この

やうな解釋をしてをります。

私が「ウタフ」「カタル」について興味をもつたのは、その區別が出來ない境があるのではないかと考へたからです。例へば、浪花節はウタフのかカタルのか、どちらとも言つてをります。青森縣へ調査に行つたとき、八戸市の郊外の階上村でイタコにオンラサマを遊ばせて貰ひました。イタコが装束をつけたオンラサマを手に持つて祭文を讀んでゐましたけれども、目が見えないのですから臺本はありません。この歌つてゐるのか語つてゐるのか分らないやうな祭文を唱へることを「ヨム」と言つてゐました。その中には長い敘事詩の「オンラサマ一代記」などもあります。語ることも歌ふことも引つくるめて「ヨム」と言つてゐる、その時にひらめいたものがある、何かわかつたやうな氣がしました。

しかも、オンラサマを遊ばせる、「アソバセル」「アソブ」といふ言葉にも大變深い意味があると感しました。平安朝では音楽のことを「遊び」と言ひ、あるひは舞も入つてゐました。「御遊び」の言葉が盛んに出て來ます。公卿殿上人達は御遊びと稱して、夜の十時くらゐから明け方の二時くらゐまで管弦を奏してをりました。「東遊び」や「神遊び」などもあり、神様に捧げる神事の行動もまた「遊び」であるわけです。ですから「アソビ」といふ意味も、時代によつて大變動があるわけです。そして、オンラサマをお祀りすることが「アソバセル」ことになり、その時に祭文を唱へますが、それらを合はせて「アソビ」と言つてをります。ですからかなり古い用語例を持つてゐるわけです。

この青森縣階上の採訪以來、「ヨム」ということに關心を持つて來ました。「ヨム」といふ言葉がいろいろな用語例を持つてゐることとすぐに分ります。「讀み人知らず」とか、數を數へることも讀

む、月讀といふ神様も出て来ますし、曆もあり、聲を出して歌ふことも讀むと言ひ、多種多様な意味を持つてゐます。更に言ふならば、稗田阿禮が舍人として大變有能な語り部であるといふことが『古事記』の序文に書かれてをります。稗田阿禮といふ人は二十八歳で、目に度れば口に誦み、耳に拂るれば心に勒すといふ人物だと書いてあります。そこで天武天皇が帝室の日繼や物語のやうな歴史をば誦み習はせる詔を出されたのです。

とにかくその「ヨム」でございますが、「誦む」の字がびつたりするやうな氣がします。いろいろな意味がありますけれども、節をつけて言ふのがこの「誦む」であります。暗誦するといふのもこの誦を使ひますが、ただ言へばいいと言ふのではなくて、元來の意味は節をつけて聲に出すといふことでございます。誦と同じだとも言はれ、諷誦なんぞと使はれています。節をつけて言ふといふことは、これは随分と廣い意味になります。かうしてみると、歌謡と言ひ、説話と言ひ、ある段階では「ヨム」といふことで統合されてゐたステージがあつたのだらうと考へられます。さういふ點ではこの「ヨム」という言葉をもつと重く考へてもいいのではないかと思ふやうになつてをるのでございます。

#### 四

先程、『岩波古語辭典』の中の「ウタフ」「カタル」の語源説にどうも納得がいかないことを申し上げましたが、ここでまう少し語源的にどうであつたかを考へてみたいと思ひます。「ウタフ」は、山形大學の淺野建二教授とか私は、「ウツ」といふ言葉で考へてをります。亡き大久保正君が「口承文藝から記載文藝へ」という論文の

中で、今の學者の中では淺野氏や臼田氏も同じ考へらしいがと書いてをりまして、どこまで淺野教授と私が細かく一致するかどうか分りませんけれども、とにかく、「ウタフ」といふ情況で伴奏するものがあつたとすれば、弦楽器や管楽器もありますけれども、打楽器のやうなものが簡單で古い氣がいたします。どうしてかと言ひますと、そこいらに落ちてゐる棒でもリズムがとれるし、持つものがなくとも手を打てばよい、あるいは手で體を打つてもよい。一番早く考へつく打楽器が樂器の出發だらうと思はれるのです。さういふことで「ウツ」といふことから考へてみる必要があります。ただし、「ウタフ」といふときには、さういふ即物的には解釋できません。それは、言葉の表現活動ではありませんから、やはり言葉の表現活動を蔽つてゐる言葉の働きを考へなければならぬからです。言語表現としてはそちらの働きである「打つ」の再活用であると考へられます。

「カタル」はどうかと甲しますと、これは「搗つ」といふ動詞の再活用です。今日では獨立しては用ひませんが、複合語として残つてをります。搗ち米は夏の甲子園名物となつてゐますが、いはゆるぶつかぎです。あるいは搗ち臼、麥搗ち唄、石場搗ち唄などは複合語です。富山あたりでは單獨でも使つてをりました。ぶんぐるぞと言ふ意味あひのときに、「搗つぞ」と言つてゐたさうです。勝栗、これは縁起が良いから「勝」と書きますが、實際は栗を蒸して干すと皮と實との間に空氣が入り、それを臼に入れて杵で搗けば穀と實がよくはなれます。したがつて、元來は「搗ち」であつたわけですから。以上のやうに「カチ」は随分と使ひ道があつた言葉なのです。そこで「カタル」も「カツ」の再活用だといふのが私の説であります。これは丁度神が顯はれるといふ意味での「顯つ」から、「祟る」

が出てくるのと相似てをります。

さうすると、言葉の働きで相手の魂に衝撃作用を與へる、さういふ點では、「カタル」も「ウタフ」も同じやうな意味あひの言葉であります。だからこの言葉の未分化のときもあつたに違ひありません。さうすると、「ヨム」という言葉がその未分化状態を指す言葉であつたのではなからうかと考へられます。「ヨム」の語源はどうかといふことになりますと、どうも「イフ」といふ言葉と關係がありさうです。「ヨム」といふのも魂の状態を表はすとすれば、こちらの方は「齋む」と關係があると思つてをります。勿論、かういふ言葉の後に、「クドク」が平安朝あたりから、「ハナス」が中世あたりから出て來ます。さういふのは時代的に分つてくるのですが、かういふ言葉の働きからみていくと多分に組織づけられるのではあるまいか。さうすると、どうも歌謡と説話といふものが未分化と言はうか、どちらにでもとれる未分化から分化して行くステージがどこかあつたと考へられます。

## 五

さういふ狀況がどこかに残つてはゐないかと考へますと、私は南島の口承文藝に期待をかけてゐるのであります。南島の方には、ウタではユンタ、カタリで言へばユンガタリといふものがあり、ユングトウといふものもあります。このユングトウを私はヨミゴトだと直感しまして、竹富島出身で南島歌謡を研究してゐる狩俣恵一君に話しましたところ、彼も賛成してくれて研究発表などでさういふことを述べてをります。私が證明するのは大變ですけれども土地の人がさう言つてくれてゐるので、私が言はなくてもユングトウはヨミゴ

トだという説がだんだん勢力を得てくると期待してゐるのです。

ユンガタリといふのも「夜の語り」といふ説がありますが、どうもそれ以前があつたのではないか。ユンタといふのも「夜の唄」という以前にヨミウタと言つたときがあつたのではないか。本土の方でも、ヨミウタといふのは、『古事記』『日本書紀』に出て來ます。このヨミウタは慶祝するの慶の字をあててゐるのですが、私は賛成しきれない感じを持つてゐるのです。

とにかく、ウタとカタリが分化する前には、その中間過程に何かあつたのではないかと考へてをります。それを私は、天語歌あるひは八千矛の神が沼河比賣を婚ひしたときの歌の最後をとどめるのに使はれてゐる「事の 語りごとも こをば」といふ句に着目してをります。

更には「歌もちて語りて白さく」といふ言葉が仁徳記に出て來ます。これは天皇が豊の樂をしようとして日女島に行幸されたとき、建内宿禰に歌でもつて雁が卵を生んだとはどういふことだとお尋ねになつた。普段のしやべる言葉でいふべきところを歌でお尋ねになり、それに對し建内宿禰も「歌もちて語りて白さく」と歌でお答へしてをります。

高光る 日の御子、

諾しこそ 問ひたまへ。

まこそは 問ひたまへ。

吾こそは 世の長人、

そらみつ 日本の國に

雁子産と いまだ聞かず。(歌謡番號七三)

これだけでは答へにはならないのですが、とにかく、歌をもつて答へるといふ記事がござゐます。ですから、やはりウタとカタリに

分化する中間過程に両方共有するといふことがあつたといふことを文獻的には言ひ得るのではないでせうか。かういふ状況を口承文藝においてはどうかといふと、先程述べましたやうに、南島の方で言へるのではないかと考へられます。ユングトウ、ユングタリ、ユンタ、といふものが生きてゐる點に注目してゐるのです。

南島と言へば、沖繩國際大學の遠藤庄治さんが宮古島の口承文藝について報告されてをります。それによると、宮古島には非常に神話的傳承といふものが多く、敘事詩と語りと兩方で傳へてゐるといふ状況があるさうです。宮古島は私もほんの一晚泊つただけでございいますが、まことに注目すべき所だと思ひました。とにかく道一つ隔ても言葉が違ふといふことを言つてをりました。部落部落で言葉の違いがある、さういふ所には口承文藝の方面ではきまつて面白い傳承があるのです。遠藤さんの報告の中で今言つたやうな状況が報告されているのも偶然ではないでせう。法政大學沖繩文化研究所の外間守善さんたちも、『宮古島の神歌』といふ資料を出してをりますが、さういふところで私の今言つたやうなことを證明してくれないのではないかと思つてをります。

言葉の非常に強い「ウタ」と言ひ、「カタリ」と言ひ、それは物事の起りを説く「起源傳承」だと私はにらんで來てゐたのであります。これは古いといふことではなくて言葉が強いといふことです。一般的に言ひますと、先刻のフィンランド文學協會の一つの標目とみなつてゐます *an etiological tale*, ドイツ語ですと、*Ursprungssage*、つまり起源譚、由來譚と言へませう。これは並列した横の並びであるのではなく、かなり古い姿を示すものであるだらうといふふうに思つてをります。

(うすだ じんごろう・國學院大學)

※本稿は昭和五十六年六月五日に日本口承文藝學會第五回大會(國學院大學)でおこなはれた講演にもついでゐる。

●日本口承文藝學會は、会則にも謳つてありますように、日本および諸外国の口承文藝に関連するものの調査、資料収集、研究を促進し、研究者間の交流をはかることを目的に設立されました。つきましては、この目的を達成するために、各県各市町村の口承文藝に関する調査報告、資料等を學會にご寄贈ください。会員諸氏のご協力をお願い致します。

●会員の方々の口承文藝に関する原稿を募集いたしております。研究論文は四百字詰原稿用紙三十枚前後、資料報告は三十枚以内で日本口承文藝學會機關誌編集委員会宛にお送り下さい。なお、掲載等につきましては編集委員会にご一任下さい。